

アイヌ文化復興拠点として国が白老町に整備した民族共生象徴空間（愛称・ウポポイ）が七月一二日開業した。アイヌの文化を発信する一方で、伝統の伝承者育成や研究など多様な役割を担うナショナルセンターとなる。

開業に先立つ一日の記念式典では、菅義偉官房長官が「アイヌが民族として名譽と尊厳を保持し継承することが、多様な価値観が共生し活力ある社会にするために重要」とあいさつ。民族・文化の多様性が日本社会にとって重要であると指摘した。「箱モノ」「遅れている民族政策のガス抜き」など様々な批判はあるが、まずは国が多様性を認め共生社会に取り組みと宣言した象徴として、息の長い施設になるよう応援したい。

二〇一九年四月には、アイヌ民族を先住民と法的に認め差別を禁止し、地域振興への交付金を盛り込んだアイヌ施策推進法（アイヌ新法）も成立。和人とアイヌが混在して生きる現代社会で「共存への第一歩」として歓迎する声が多く、交付金はすでに一七億円が投じられた。平取町二風谷では伝統の木彫りや織物の材料を採取する森を育てる事業が開始されるなど、地道な伝承活動を支える財源になる。一方で、さつぽろ雪まつりで交付金が大手の広告会社に支払われ批判されるなど、必ずしもアイヌの思いが反映されていない事業があり、改善

アイヌ施策の意義

点や議論すべき余地がある。

アイヌを取材して感覚的に思うのは、世代間の感覚の違いだ。もちろん個人差はあるが、差別にさらされ生活に必死だった世代、先住民としての権利を認めるよう戦い現在も戦い続ける世代、そして現在、ある若いアイヌが「日本人で道民でアイヌ。当たり前のアイデンティティとしてある。アイヌは特別じゃない」と話すように、文化を残すための焦燥感や葛藤に駆られながらも、のびのびと自然に誇りを持って文化を継承しているように感じる。

国立アイヌ民族博物館館長の佐々木史郎氏も「若いアイヌの希望で差別や同化政策といった暗い過去ばかりではなく、文化の素晴らしさを前面に出す展示にした」と語る。

もちろん、それが過去の侵略行為や差別の歴史の免罪にはつながらず、政府は当事者として経緯の説明や総括が必要だ。先住民であれば補償される、土地や資源に対する先住権に関する議論も置き去りで、河川での伝統的なサケ捕獲の権利を求める動きもある。世界的な先住民の権利保護の動きに沿って議論すべきだ。

また、研究のために各地のコタン（集落）から持ち出された遺骨はウポポイの慰霊施設に集約されるが、責任を持って地域に帰す事業を引き続き国が進めるべきで、未だ

収集や尊厳を無視したずさんな管理に対して謝罪を拒む北海道大学などの学問の暴力とその責任についても総括が必要だ。

加えて大きな問題がアイヌ差別を助長する風潮だ。麻生太郎副総理は未だに「一つの民族」という誤った発言を繰り返し、ウポポイ開業式典の前日に萩生田光一文科大臣は「（アイヌへの）差別は価値観の違い」と言い放った。ウポポイ開業を取り上げた記事にはインターネットで「本当のアイヌではないのに金目当て」「まだアイヌやつてるのか」などという投稿が目につく。

同化政策による文化への攻撃という大きな過ちの責任を、遅まきながら、いま政府は取っている。また、アイヌ新法の条文には「アイヌの人々が民族としての誇りを持って生活することができ、及びその誇りが尊重される社会の実現を図り、もって全ての国民が相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に資することを目的とする。」とある。

アイヌ施策はアイヌのためだけのものではない。先に挙げた大臣発言やネットの投稿はそういった趣旨に反する言動だ。アイヌ施策が一步前に進んだウポポイ開業を機に、和人とつってのアイヌ施策の意義をもう一度考えたい。

△限▽